

先月までは、「Welcome to The INTERNET」という記事でインターネットのいろいろな問題点の提起をしてきました。今月からは多少模様替えをして、インターネットに興味をおもちの各業界の方をお呼びして、インターネットの可能性や問題点について意見を交換していきたいと思います。

今月は、年末に好例となったラジオのチャリティ番組である「ラジオ・チャリティ・ミュージックソン」を企画されているニッポン放送の宮本編成局長をお招きしました。

## 吉村 伸の インターネットへようこそ!

今月のお客様

宮本幸一：ニッポン放送編成局長

「今日の放送を家に帰ってから聞けるのはラジオにはないインターネットの魅力。」

吉村：先日のローリングストーンズのコンサートのように、音声や動画の放送メディアとしてインターネットをみたときは、まだまだ十分な品質を確保できないわけですが、双方向性ということに注目されている方は非常に多いと思います。まず、ミュージックソンの企画と放送というメディアに携わる方からみたインターネットへのアプローチについてお聞かせください。

宮本：ニッポン放送では、12月24日から25日までの24時間、「目の不自由な方へ『とうりゃんせ基金』を！」と題して、恒例のチャリティ番組を企画しているわけですが、今年はこちらをインターネットに乗せようと思っているわけです。たとえば、刻々と変化する募金額をWWWで見

られるようにしたり、リスナーからのメッセージを電子メールでもらったりということです。

そもそも、なぜインターネットなのかというと、ローリングストーンズのコンサート中継の報道にみるように、「インターネット」には新聞の一面をかざってしまうほどのニュースバリューがあるからなんです。もちろん、実際にストーンズの画像を見られた人は限られているわけですが、プロモーション素材としての魅力を非常に感じます。また、海外でのチャリティへの考え方は日本以上にありますので、日本でもこういうチャリティをやっているのですよということアピールする意味もあります。

実際はどのくらいの人アクセスできるのかと考えるとまだまだ疑問な部分があります。海外を意識したときの言語の問題もあります。

そして、ニッポン放送は新しいものが好きなので、なにしろ立ちあげようということです。

吉村：ラジオという電波を使ったメディアを考えると、空間的な広がりがある限定された条件

があるわけですが、インターネットは空間的には地球全体に広がる可能性があるわけです。同時性と空間的広がりをもつメディアであるインターネットにはどのような可能性を感じますか？

宮本：悲しいことに放送した内容は消えてなくなってしまうのです。いまだAMラジオをエアチェックする人なんてほとんどいませんが、なかには読み物にしてもいいし、それを明日知ってもいいし、1か月後に知ってもいいような価値のある情報もあるのです。でも、放送をたまたま聞いた人しか知りえないという悲しさがあるのです。きょうニッポン放送でしゃべったことをなんらかの方法で残し、家に帰ってから知ることができるというのは、私達のメディアにはなくインターネットやパソコン通信にはある魅力だと思います。

今回の企画に関していえば、募金の受け付け場所はどこかなどを自分の好きな時間に知ることができますし、電子メールでメッセージを送り、それを番組で活かせるということなど、番組を聞いていなくても、インターネットから番組に参加できるというある種のインタラクティブ性があります。それに電話では混んでつながらないことも多々ありますが、電子メールなら、そういったこともありません。このように「消えていってしまうメッセージ」をユーザーが好きなきに好きな情報を得ることができるという、放送だけではない参加の幅が広がるのではないかと期待しています。

「みなさん自分の手で情報を発信したいんですね。これにはたまらない魅力があります。」

吉村：放送を聞けない人もインターネットを使ってアクセスできるというのは大きなテーマですね。ところでインターネットは放送ではなく、一種の通信網なので、個人や非常に小さい単位で不特定多数に対してメッセージを送り出すことができるわけです。つまり個人が自由にいろいろなコンテンツを提供することができるということをどうお感じになりますか？

宮本：個人で情報を出せるのは魅力的だと思います。たとえば最近ではミニFM局は申請だけでもたいへんな数があるようです。しかし、ビジネスとして考えると採算は合わないでしょう。それでもやりたがる人がいるということは、自分の手で情報を発信してみたいんですね。



【宮本幸一】  
ニッポン放送  
編成局長



【吉村 伸】  
株式会社インターネットイニシアティブ  
技術企画部 部長  
WIDEプロジェクトボードメンバー



それは、なんらかのリアクションがあるからで、たまらない魅力があるのでしょう。しかもそれがなんらかの影響をもつのですから。

放送という立場から考えると、こうしたことが普及していくと脅威ですね。ですから自分達もそのなかに入り込んで、いままで自分達のできなかったことを可能にするということを模索するということが重要だと思っています。そのためには、なにかやってみよう。そして、やることによって、ヒントが得られるということです。

吉村：やはり脅威ですか？

宮本：インターネットは2000年には2億人が使うことになるといわれ、それが本当になるならば、それは脅威ですね。メディアといえば、放送と活字といわれていた時代がこの10年から20年で大きく変わったわけです。テレビだって、放送を映すだけのものから、ビデオがつながり、テレビゲームまで映すものに変化したわけです。そういう意味で、将来はいまわれわれのやっているメディアは単なるOne of Themになってしまうわけですから、それを取り込んで、自分達が変化していかなければならないでしょう。

吉村：ラジオやテレビが登場したとき、新聞がなくなるのではないかと恐れられてきたが、なくなるどころかむしろ大きくなっているくらいです。コンピュータネットワークがメディアの一角に加わっても、どれかがなくなるわけではなく、それぞれの役割があるのではないのでしょうか？

宮本：所詮、放送はパーソンツーパーソンにはなりえないでしょうね。ラジオ放送が通信と一番違うところは、パーソンツーパーソンの通信を素材として大勢の人に聞かせているところです。通信の場合は純粋にパーソンツーパーソンの情報交換をしていくことでしょうから、ラジオなり放送がなくなることはないと思います。でも、通信を取り込むことで、放送も変化できるのではないかと考えています。インターネットは道路みたいなものなので、なにができるのかということとその発展のしかたも大きく変わっていくのだらうという期待と不安があるわけです。

「本当に価値ある情報ならコスト負担は障害にはならない。」

吉村：たとえば新聞は月額3000円程度、テレ

ビはNHKやBS、CSなどでは一部有料、ラジオは無料なわけです。電話は使用量に応じた料金体系。コンピュータネットワークは、ダイヤルアップ接続などのローエンドのサービスでは、電話のような使用量に応じた料金体系です。

このように情報へのアクセス手段の違いによって、そのコスト負担は違うわけですが、コンピュータネットワークに関していうと、放送と同程度の機能を提供しているにもかかわらず、料金は電話と同じくらい高い。こういう状況をどのようにお考えですか？

宮本：お金をかけても価値ある情報が得られればいいわけで、高いか安いかはその人の価値観があるので一概にはいえません。魅力的なソフトを放送するなら視聴者はお金を払ってくれるでしょうし、逆にタダならラジオを聞いてくれるかという、必ずしもそうではありません。ですからコストは基本的な障害にはならないと思います。もちろんインターネットの場合は負担できる限界はあるでしょうけれども。

逆に個人でインターネットを使っている人はどういう使い方をしているのでしょうか？自分のビジネスに利用されている人が多いのですか？

吉村：ある一定のコスト負担をしなければならぬということから、明確な見返りの期待できる人からユーザーになっています。電子メールが交換できないと困るとか。そして、どの世界にもいる新しいことの好きなひと。

宮本：すでにパソコン通信もかなり普及していますよね。国内だけでも200万人もユーザーがいるわけですが、パソコン通信とインターネットの基本的な違いはどこにあるのでしょうか？

吉村：パソコン通信は、そのサービスを提供する人がコンテンツの枠組みを決めているのです。決してコンテンツを作っているわけではないですが、しかしインターネットでは、あらかじめ決められた枠組みは何もなく、自分で決めて発信できます。もちろん仕組的な違いもありますが、この枠組みが用意されているか、されていないか大きな違いでしょう。もちろん枠組みがあった方が楽だという人もいますが、それ以上に制約なしに自分で気持ちよく作れるということが大きいと思います。インターネットが普及するとパソコン通信がなくなるという人もいますが、お互いが補完しあって、お互い伸びていくのではないかと思います。

宮本：映像や音声をかなりのクオリティで流せるように、近い将来なるのでしょうか？

吉村：電話の技術をベースにしたものでは無理だと思います。よく、CATVとの関係が議論されますが、すでにCATVの線が引かれているのだからそれを使おうという話と、どうせこれから引くなら高価なものだしいろいろな用途に使いたい、そしてCATVのもっている機能、つまり双方向性はインターネットももっている機能だという話し。通信といえば、電話を考える人もいますが、電話のネットワークを使う必然性はまったくありません。たまたま、いま電話の技術を使っているだけなのです。インターネットのようなネットワークが必要だったら、電話とまったく違う体系の通信サービスが提供されるということが必要で、それなくして「インターネット型」の通信と放送が融合した新しいコミュニケーションシステムは普及していきにくいでしょう。そのために、いろいろな分野の方とインターネットの可能性を考えて、いろいろなサービスが出てきてほしいと思います。

宮本：回線の整備、つまり光ファイバーのようなものが各家庭に入っていけば、放送なんて誰でもできてしまうのですよね。そうなったときをラジオは生き残れるのかと脅威に感じるわけです。もしかしたら、誰も聞いてないかもしれないし、誰も見てないかもしれないけど、好きなことをしゃべって、好きな曲をかけて、情報を発信できるという満足感が半分と、もしかしたら誰か聞いてくれているのではないかと満足感が半分。そんなミニFM局よりもっとパーソナルなものが山のようにできるかもしれません。いままではみんな受け身だったのが、大半の人間が受け手であり、しかも送り手である時代がやってきたとき、ラジオはどうするの？ということ考えると難しいところです。

吉村：きょうはどうもありがとうございました。ミュージックソンの企画は、今回で終わりではなく、これが始まりだと思います。今度はその成果や別の企画のお話しができればと思います。

宮本：今回のミュージックソンは期間限定の企画ですが、こういう機会を何度か積み重ねること、われわれおもしろいことができるのではないだろうかと思っています。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)